□Sweeney, B. M.: **Rhythmic phenomena in plants**, 2nd ed. i-xii+172 pp. 1987. Academic Press, San Diego, U. S. A. 著者はカリフォルニア大学（サンタバーバラ）の生物学の教授で，永年単細胞性の渦鞭毛藻ゴニオラクス（*Gonyaulax*）の発光現象の生物リズムについて研究し，多くの業績を挙げた学者である。今回，単細胞生物から種子植物に及ぶ植物全般について，生物リズムの研究成果を総説した本を出版した。植物の内在リズムの最初の記述は葉や花の就眠運動に関するもので，これに“plant sleep”の意の用語を与えた学者はリンネ（1755）であり，器具を使ってこの運動を測定・記録した最初の学者は C. & F. ダーウィン（1881）であったという。第1章ではこのような植物の内在リズムの発見の歴史が述べられる。次いで，第2章はリズムに関する用語の解説と測定法。第3章は昼夜の違いによる運動，例えば就眠運動，気孔開閉，膜電位の移動，葉緑体の移動，細胞分裂，光合成能，発光，成長など，概日リズム（Circadian rythms）現象の紹介。第4章は概日リズムの機構の解明，特に生物リズムと細胞内物質の変動とイオン輸送の関係など；第5章は潮汐の干満・月令など，周期的環境要因と生物リズム；第6章は1年周期の環境要因と生物リズム；第7章は周期的でない環境要因と生物リズムの解説が中心である。最後の第8章は生物時計と人間についての記述で，著者は単細胞藻に見られる概日リズムと類似の現象が人間にも存在するとして，幾つかの例を挙げ，さらに興味をもつ読者のために下記を含む4つの文献を紹介している。Minors, D. S. & Waterhouse, J. M. (1981): Circadian rhythms and the human. Wight, Bristol, England; Reinberg, A. & Smolensky, M. H. (1983): Biological rhythms and medicine. Springer-Verlag.　（千原光雄）

□犬養　孝（監修），大貫　茂：**万葉 花の名歌** 184 pp. 1988. 毎日新聞社，東京. ¥2,000. 監修という言葉がこの頃よく使われる。必ずしも本人の編集ではなくて，しかるべき人が後見したという意味ででもあろうか。犬養氏は著名な万葉学者で，巻頭に2頁の序がある。巻末に実の著者として大貫茂氏が紹介されている。著名な紀行作家でまた写真家でもあり，万葉に関しては既に「花の万葉集」（グラフィック社）がある。美しい写真に満ちているが，植物そのものの写真よりも，植物を主体とした情景を写したものに重きを置いている。80とおりの植物があり，ツツジ，ハギ，マツタケ，タケ，ササなどの項目が，それぞれ万葉に現われた名を表題として取り上げられている。モモヨグサ（キク），アキノカ（マツタケ），アヤメグサ（ショウブ）のように題名を定め，代表的と考えられた歌1首を挙げて，歌意（現代的に表記し，漢字の一部はルビ付き）および植物の説明がある。説明は図鑑的の記述ではむろんなく，あたかも万葉人の心を体現したような視点で，当時のそれぞれの階級の日常生活，ファッションなどに及んでいる。p. 169-182 に「万葉 花の名歌一覧」が植物別に列記されているが，植物の現われるすべての歌が収録されているわけではない。ただおしいことに，名歌ではなくても，上古以来の人々の心に染みわたるような庶民の歌が選に洩れているように思われる。　（津山　尚）